

弱者の復讐



チンポを育てて
女を寝取れ!



寝取られ系R-18小説

弱者の復讐・チンポを育てて女を寝取れ！

（体験版）

目次

プロローグ

第一章 勇者・セックス

第二章 駆け出し冒険者・手コキ

第三章 中堅魔法使い・フェラ

第四章 道具屋・パイズリ

プロローグ

熱風が吹き荒れる砂漠の中を巨大な荷物を背負った小男が歩いている。その男の前には背の高い顔の整った男と、絶世の美女が二人。

（くそっ、くそっ、何で俺だけがこんな目に……）

ボビーという名の小男を含むこの四人はいわゆる勇者のパーティと言われるものであった。この世界を征服している魔王を討伐するべく、世界の希望を背負って日々戦っている。しかし、戦っているのは勇者エグバード、賢者ペルラ、剣鬼ゾッタの三人だけであり、小男のボビーは荷物持ちをしているだけであった。そのため、ボビーは勇者たち三人から時折侮蔑の目で見られることもある。そのことはわかっているのだが、三人に比べて力の劣るボビーにはどうすることもできない。

「おい、ボビー。遅れてるぞ。早くしろ」

「へ、へえ」

ボビーは震える足を奮い立たせて何とか前の三人に追いついた。

「私たちの荷物を盗もつとしたお前を生かしてやってるんだ。荷物持ちくらいはしっかりやりな。それとも、今ここで私の剣の錆になるか？」

「ひ、ひいっ！ それだけはご勘弁を」

ゾッタの威嚇にボビーは簡単に震え上がる。勇者一行の中で一番血の気の多いゾッタはボビーをイジメて楽しんでいるようでもあった。

「もっ、そんなボビーさんをイジメてはかわいそうですよ」

「へえ、それならペルラがボビーの面倒を見てやれよ。賢者様ならそのくらいの慈悲があってもいいんじゃないか？」

「そ、それはちょっと……」

賢者のペルラはボビーに同情するようなことを言ったが、本格的にボビーを助けるつもりはないようだ。中途半端なやさしさがゾッタ以上にボビーをイラつかせる。

（こいつら、俺をイジメて楽しんでやがるんだ。くそっ、見た目は最高の女なのに、中身は最悪だな。これが勇者のパーティっていうんだから世も末だぜ）

そのパーティのリーダーである勇者はボビーのことなどまるでいないかのように無視している。嫌っているというよりは、ボビーが初めからこの世に存在していないかのように無関心なのだ。そのため、ボビーは勇者に対してもいい感情を持っていなかった。

（ああ、逃げられるのなら今すぐ逃げ出したいぜ……）

しかし、ステータスからしてほかの三人と天と地の差があるボビーでは逃げることもすらかないだろう。結局、ボビーはこのまま勇者パーティの荷物持ちとして生きていくしかないのである。

その時、砂漠の下から大型のモンスターが現れた。サンドワームという砂の中に住むモンスターだ。

「うわあっ！」

ボビーはあまりの巨大さに腰を抜かした。勇者たちの荷物がその場に散乱する。しかし、勇者たち三人は驚きもせずさすま戦闘態勢に入った。

「ペルラ、俺とソッタに支援魔法を。ソッタは口からの毒液に注意しながら牽制をしてくれ。

トドメは俺が刺す」

「かしこまりました」

「わかったぜ」

エグバードの的確な指示により二人が動き出す。ペルラは魔法によりエグバードとソッタに攻撃力、防御力、素早さを上昇させる支援魔法をかけた。ソッタはその支援魔法で強化された身体で左右にフェイントを入れながらサンドワームに近づいていく。サンドワームは口から毒液を吐くが、素早さを強化されたソッタにはかすりもしない。そしてソッタがサンドワームの懷まで潜り込むと、強烈な一撃でサンドワームの腹を切り裂いた。

「今だぜ、エグバードっ！」

「おっっ！」

腹部を切り裂かれてもだえるサンドワームの頭上にエグバードが跳びあがっていた。そしてそのままエグバードの剣がサンドワームの頭を切り裂いていく。

サンドワームは醜い悲鳴を上げてそのまま動かなくなった。

（す、すげえ……）

ボビーはこの戦いを震えながら見守っていただけである。これでは三人から軽く扱われても仕方がないだろう。

「おっ、この戦いで私はレベルアップしたようだぜ」

「私もです」

「おおっ、俺もだ。ちょうどみんなのレベルアップが同じタイミングになったんだな」

エグバードたち三人はレベルアップしたのを機に懷からとある一枚のカードを取り出した。

この世界でスキルカードと呼ばれるもので、レベルアップとともに発生するスキルポイントというものを使って能力を強化したり、特技などのスキルを習得するものである。これは認可を受けた冒険者なら誰でも手にえられるものだった。

「しかしもう私は大体のソードスキルは取得しちゃったんだよなあ。遊び半分に別の職業のスキルでも取得するか」

「もう。ダメですよ、ソッタ。私たちは魔王を倒す旅をしているんですから、貴重なスキルポイントを遊びで使っちゃいけません」

「そうは言っけどよお。二人とも私と同じような状況だろう？ もう必要なスキルなんてほと

んではないじゃないか」

「確かに今すぐには必要ないかもしれないが、戦闘中に必要になる場合や特殊な状況に追い込まれて使いたいスキルが出てくるかもしれない。一応レアアイテムの『スキルリセット』という一度取得したスキルをリセットしてスキルポイントに戻すアイテムもあるが、まあ、これは保険のようなものだ。スキルポイントが貴重であることには変わりない」

「へいへい、エグバードもペルラもマジメですね。わかりましたよ。無駄遣いはしませんよ」「わかればいい」

ボビーは三人の会話をうらやましそうに聞いている。冒険者にすらなかったボビーはスキルカードを持っていない。いや、持っていたとしてもまともに戦うこともできないボビーではしベルアップなどおぼつかなかっただろう。だからこそ盗人として生活していたのであり、そんな日々の中勇者たちの荷物に手を出してしまったがためにこうして荷物持ちをしているのである。

「おい、ボビー。まだそんなところに突っ立ってたのかよ。早く荷物を拾ってついてこい。いつでもなくしてたらただじゃおかねえぞ」

「へ、へいっー」

ソッタの言葉にボビーはすさまじ砂の上に落としてしまった荷物を拾い上げる。そんなボビーを待つこともなく、エグバードたちは次の目的地へと歩き出してしまった。

(こんな生活、いつまで続くんだよ……)

ボビーの苦悩はまだまだ続きそうだった。

砂漠の夜は冷える。三つのテントはエグバード、ペルラ、ソッタの三人のためのテントであり、ボビーのためのテントは用意されていなかった。ボビーはここでも不遇な見張りを任せられていたのである。

一見すぐに逃げることができそうだが、勇者たち三人のうち誰かはボビーと一緒に見張りをしているので逃げることも不可能であった。しかも今日の見張りの相手は三人の中で最も血の多いソッタである。

「あゝ、今日はついてねえな。こんなやつと見張りなんてよお」

（それはこっちのセリフだよ、まったく）

愚痴を言いたいのはボビーのほうだったが、口に出した瞬間に殴られるのはわかっている。黙っているのが一番賢いやり方だった。

「昼間の戦闘で疲れてるしなあ、もうこのまま寝ちまおうかな」

（おっ、寝る寝る。一人のほうは何倍もマシだ）

「そっだな、寝るか。おっ、ボビー。私が寝るからってサボるんじゃないぞ」

「わ、わかっていますよ」

ソッタもそうだが、勇者たちは眠っていても異変があればすぐに起きることができた。そのくらい感覚を研ぎ澄ませてなければ今まで生き残ることはできなかったのだろう。だからこそ、ボビーが一人になったとしても逃げだすことができないのだ。

ソッタは眠そうにあぐらをして自分のテントに戻っていた。すぐにイビキが聞こえてきたので、本当に昼間の戦闘で疲れていたのだろう。

「まったく、こいつらは気楽でいいもんだぜ」

ボビーは誰にも聞かれていないと思い一人愚痴をこぼす。

しばらくしてボビーも眠くなってきた。今夜は何もなさそうなのでこのままこっそり眠ってしまおうかと思う。さすがのボビーも人間なのだ。少しは眠らないと死んでしまうだろう。

（少しだけ、少しだけなら……）

ボビーが目をつむる。砂漠の静けさが耳の奥に響いてくるようだった。

しかし、そんな静寂の中にかすかな湿った声が混じるように聞こえてきた。

「……っ」

ボビーは片目を開けて一つのテントに視線をやった。それは勇者エグバードのテントであり、外見ると濡った声とともにかすかに揺れてもいたのだ。

（勇者の野郎、今日もやってやがるのか）

ボビーは「クゥ」と生唾を飲み込み、こっそりと勇者のテントに近づいていく。接近するにつれて湿った声の主がよくわかり、中で何をしているのかもはっきりと認識できるようになった。

ボビーは慎重に、バしないように勇者のテントを覗き込んだ。

「あつ、あんっ！ 勇者さま……っ！ 気持ちいいですう……」

「ああ、俺もだ」

中にいたのは勇者エグバードと賢者ペルラだ。もちろん中で行われていたのは夜の営み、セックスである。

(じいつら、毎晩のようによへやるぜ)

こんなことは一度や二度ではない。エグバードの性欲は底なしなのか、毎晩のようにペルラだけでなくゾッタも交互に抱いている。時には二人同時ということもあり、ペルラとゾッタもエグバードのこの行為を容認しているのだろう。

「ペルラの膣内はやわらかくて気持ちいいな」

「そんなこと言われると、恥ずかしいです」

「寝ているんだ、恥ずかしがることはないさ」

エグバードとペルラは互いに向き合いながら抱き合っている。対面座位というものだ。時折キスを交えながら激しく愛し合う。ペルラのその大きなお尻がボビーの目の前で上下に揺れていた。

(た、たまんねえ……)

ボビーはこうして毎日のように行われる勇者たちのセックスを覗いていた。こんなご褒美がなければやってはいけないだろう。ついにボビーは我慢できなくなり、その場でスポンを脱いでオナニーを始めた。

「勇者さま、もうイキそうです……っ！」

「いいぞ、俺も出す」

勇者たちのセックスが激しくなると同時にボビーのオナニーも激しくなる。今オナニーを始めたばかりだというのに、早くも射精しそうになっているのだ。

「あ、あああああんっ！」

(うっ、出るっ！)

三人は同時に達した。エグバードとペルラとの結合部からはドロドロとした濃い白濁液が流れ出る。それと比較してボビーの精液はまるで水のように薄いものだった。

「はああん……。勇者さま、今日も素敵でした……」

「今日はもうこれで寝られるか？」

「は……」

エグバードとペルラは甘いピロートークを始めていた。ボビーは射精した恍惚感で頭が呆けている。そのため、背後に迫っていた恐ろしい影に気づけなかったのだ。

「おっ」

「……っ！」

ボビーは頬に強烈な衝撃を受けた。ボビーの軽い体は簡単に吹き飛んでエグバードのテントの中へと突っ込んでいく。

「あががが……」

「きゃあっ。な、なんですか……!?!」

「……ソッタか」

エグバードは突っ込んできたボビーを無視して、テントの外にいるソッタに目をやった。

「ああ、こいつがノソキなんてやってやるから一発殴ってやったぜ」

「別に気づいていたんだが、まあ、殴ったならそれはそれでいいか」

「あが、あががが……」

ボビーは何本か歯が折れたようで、まともにしゃべることができない。エグバードの言葉からボビーのノソキは最初からバシっていたようだ。しかし、エグバードから見ればボビーなど虫けらとすら思っていない。完全に無視していたのである。それをバシずにくっそり覗いていると思っていたボビーは何とも情けないことだろうか。

「しかしまあ、こいつのチンポ……」

ソッタは丸出しになっているボビーのペニスを見て鼻で笑った。エグバードの立派なペニスと比較するとまるで大人と子供のようである。いや、比較することすらエグバードに失礼だと思われた。

「短小、早漏、そして射精してもこの量かよ。男として終わってんな」

ソッタはボビーの身体だけでなく心も折に来る。ボビーも自分の能力が低いことはわかってはいたのだが、こうして改めて言われると心に来るものがあった。しかも比較対象が男として完全無欠ともいえる勇者エグバードなのだからその惨めさは際限がない。

ボビーは逃げるようにしてエグバードのテントから出ていった。あのままその場にいたら羞恥心で死にたくなっていただろう。

「けっ、逃げ方まで小物だな。そのチンポの大きさにふさわしいぜ」

「ふっ」

ソッタの言葉が少し面白かったのか、柄にもなくエグバードは軽く笑った。

「そんなことより、お前たちのセックスの匂いを嗅いだら私まで興奮してきたじゃねえか。エグバード、責任取ってくれよ」

「ちょっとソッタ。勇者さまは私とのセックスでお疲れになっているのよ」

「いや、構わない。ソッタ、近くに来いよ」

「おっ、いいのか。やったぜ」

エグバードは一発ペルラの膣内に出しているというのにまだセックスができるようだった。「発出したらもう当分勃起できないボビーとはそこも大違いである。」

「それなら勇者さま、そのあとは私ともう一度……」

「おいおい、それなら私は二回はやってもらわねえと不公平だろう」

「今日は私の番なんですから、私のほうが多くなるのは当然です」

「いいや、ペルラは普段からセックスしすぎなんだよ。おとなしい顔して頭の中はピンク色だよ。少しは自重しろ」

「ソッタなんて獣のように品のないセックスばかりしてるではありませんか。もっと勇者さまのことも考えたセックスをですね」

ペルラとソッタの言い争いは外にいるボビーにまで聞こえてきた。喧嘩しているようだが、ただの勇者エグバードの取り合いである。エグバードにとっては内心笑えて仕方がない光景だそう。

「いいさ、今日は二人が満足するまで付き合ってやる」

「いいのかよ。やったぜ」

「さすが勇者さまです。絶倫ですね」

容姿、強さ、そして夜に至るまでボビーは勇者エグバードの足元にも及ばない。

(ちくしょう……。俺はずっとこのまま惨めに生きるしかねえのかよ……)

ペルラとソッタの喘ぎ声は、それから朝方まで続いた。

翌日、勇者一行は砂漠の中にあるダンジョンに潜っていた。このダンジョンの奥には魔王を倒すために必要な貴重なアイテムが眠っているという。

「おい、ボビー。まだ遅れてるぞ。早くしろっ」

「へ、へへ」

ボビーはよろよろと勇者たち二人のあとを追っている。昨日ソッタに殴られた影響でまだ身体がフラフラするのだ。しかし、そんなことを口にするればソッタに自業自得だと言われるだけだろう。ボビーは何も反論できずに黙々と荷物持ちをするしかなかった。

「このダンジョンの奥にあるレアアイテムとは何でしょう？ 魔王を倒すために必要なアイテムという話ですが」

「やあな。調べてみるまではわからない。しかもその情報が正しいかどうかも怪しいものだからな」

「なんでそんなあやふやな情報のためにこんなところまで来なくちゃいけなかったのさ」

「念のためだ。間違っていたならそれでいい。しかし、もし本当に必要なアイテムなら手に入れているかなければいけないだろう」

「なるほど、さすが勇者さまです」

すでにエグバードたちなら魔王も倒せる実力はあるだろう。それでもエグバードはこういう噂を聞いている一つつ潰していきながら旅を続けているのだ。その強さに慢心することなく確実に魔王を倒すための旅をしている。まさに魔王討伐という点に関しては理想的な勇者だった。

「待て」

先頭を歩いていたエグバードが急に立ち止まった。ペルラとゾッタも気づいたように、すぐに足を止める。

「落とし穴か」

「ですね」

古典的なトラップだが、引っかかればどこまで落ちるかわからない。単純な罠ほど引っかかったときのダメージは大きいものだ。

「気をつけろよ」

「はい」

「こんな罠に引っかかるやついねえよ」

エグバードたち三人はするすると落とし穴をよけて前に進んでいく。ボビーもそこはもともと盗人をやっていただけあり、前の三人が進んだところを見て罠をよけながら歩いた——はずだった。

「あれ？」

ボビーは昨日ゾッタに殴られたダメージが今来たのか、それとも荷物があまりのも重すぎたのかわからないが、落とし穴の間を歩いているときに足元がふらついてしまった。当然、ボビーは思いつきり足を踏み外して落とし穴の罠を踏んでしまう。

「う、うわあああああああっ！」

「ちっ、あのバカっ！」

すぐさまゾッタが落とし穴に飛び込んだが、それはボビーを助けるためではなかった。

「おっと、あぶねえ。大事な荷物が落ちるところだったぜ」

「大丈夫ですか、私たちの荷物は」

「ああ、なんとかな」

ボビーが穴に落ちたというのにペルラとゾッタは荷物の心配ばかりしている。エグバードに至っては相変わらず関心が薄い。ボビーを心配している人物は一人もいなかった。

「あゝあ、荷物持ちがいなくなっちゃったぜ。どうするんだよ、これ」

「みんなで分担して持つしかないだろう。俺が少し多めに持とう」

「ったく。ボビーのやつ、本当に使えないやつだったな」

エグバードたちはすでにボビーは戻らないものだとして扱っていた。それだけ落とし穴は深く、そしてどこまで続いているかわからなかった。普通に考えればこの穴に落ちて生きていれるはずはない。

ボビーの人生はここで終わってしまったかに思えた——。

「う、うう……」

——しかし、奇跡的にもボビーは生きていた。どうやって助かったのかはわからないが、ボビーはほぼ無傷で最下層まで到達したのである。

「お、俺、生きてるのか……?」

辺りは真っ暗だ。ただ一つ、ポツリとそこだけ穴が開いたように光が灯っていた。ボビーはその光に吸い寄せられるかのように近づいて行く。

「な、なんだ、じしゅあ」

そこにあったのは小さな宝箱だ。まだ誰にも開けられていない。

「まさか、これがいっつの言っていたレアアイテムか? ようやくあいつらと離れることができたんだ。このレアアイテムを奪ってから逃げても罰は当たらねえよな」

基本的にダンジョンで見つけた宝箱は早い者勝ちである。ボビーが最も早くこの宝箱を見つけたのだから、これはボビーのものと言ってよかった。

「さて、何が入ってるのかなあっと——っわっ!」

しかし、宝箱を開けるとそこから黒い煙のようなものが噴出した。ボビーは慌てて宝箱を捨てる。しかし、すでに宝箱は開いているのだ。黒い煙が止まることはない。

「へっ、これもトラップかよ。どうして俺の人生はこんなばっかなんだ」

ボビーは泣きだくなった。つい先ほどまでは勇者パーティの荷物持ち。落とし穴に落ちてからは帰り道もわからない。見つけた宝箱は偽物。自分が世界で一番不幸であるかのように感じられて仕方がなかった。

「せめて俺の人生、一つくらいいいことがあってもいいじゃねえかよっ!」

ボビーは誰に聞かせるでもなく叫んだ。

「ククク……、面白いことを言っやっだ」

「だ、誰だっ?」

誰もいないと思ったのだが、いつの間にかボビーの近くに誰かがいたようだ。気づけば黒い煙もどこかに消えている。

「俺か? 俺は、いわゆる悪魔ってやつだな」

姿を現したのは鋭い目つきに蝙蝠のような翼をもった悪魔だった。魔王ほどではないが、この世界で大いに恐れられている存在である。

「あ、悪魔……っ?」

ボビーはさらなる不幸に顔を引きつらせる。勇者エグバードたちがいるならまだしも、ボビー一人で悪魔と戦うことなどできない。これならまだ一人で暗闇の中に閉じ込められていたほうがだいぶマシだった。

「そう恐れるな。俺はお前のように心がねじ曲がったやつは大好きだぞ」

「へ? そ、それなら俺を見逃してくれるんですか?」

「いいや、ダメだね」

「縷の望みに賭けてみたのだが、やはりダメだったようだ。今度こそボビーの人生はここで終わるかもしれない。」

「しかし、封印を解いてくれたお礼だ。お前に面白いものをやるわ」

そう言って悪魔はボビーに何かカードのようなものを投げてきた。ボビーは悪魔からの攻撃かと思ひ両手で顔を隠して身構える。カードはボビーの足元に突き刺さった。

「だからそう恐れるな。それは武器ではない。スキルカードだ」

「ず、スキルカード……?」

ボビーはおずおずと足元に刺さったカードを覗き込む。確かにそれは何も書かれていないスキルカードだった。しかし、普通のスキルカードの色は白色だが、このスキルカードは真っ黒である。少なくとも普通のスキルカードには見えなかった。

「それはお前のものだ。受け取れ」

「えっ? い、いただけるので?」

「ああ。早く手に取れ」

悪魔に催促されては断れない。勇者一行といい、悪魔といい、そうしてボビーの周りに現れるやつらはこつも圧倒的な強者なのか。

ボビーは悪魔に言われた通りに黒いスキルカードを拾い上げた。すると、何も書かれていなかったスキルカードに次々とボビーのステータスが表示され始めた。初めて見る自分のステータスにボビーは興奮する。

「お、おおっ! これが俺のステータスかよ」

しかし、何かがおかしい。通常あるはずの『力』や『素早さ』などがなく、なぜか『長さ』や『太さ』などの項目があるのだ。これは一体何のステータスなのか。

「あ、あのお、これって何のスキルカードなんですか?」

「人の欲望を最も反映するスキルカードだ」

「人の欲望……?」

ボビーの欲望に関係しつつ、『長さ』や『太さ』などに関係しているものがある——。

「まさか、これって俺のチンポに関するステータスかっ!」

「ククク……、そうだ。人の欲望とは肉欲のこと。三大欲求の一つでもある」

「はあ、それは別にいいんですけど、その、肝心のステータスが……」

名前 ボビー

長さ 6センチ

太さ(周径) 4センチ

精液量 Gランク(最低)

持続時間 Gランク(最低)

テクニック Gランク(最低)
魅力 Gランク(最低)
保有スキルポイント 0

「これって、どうなんですか？」

「まあ、ひどいもんだな。お前は男として最低クラスの生殖能力しかないということだ」

「や、やっぱり……」

わかってたことだったが、改めてこうしてステータスという形で表されると心に来るものがある。ボビーは大きくため息をついた。

「何を残念がっている。それはスキルカードだといっただろう。つまり、スキルポイントを使えばそれらの数値を上げることができるんだぞ」

「な、なるほどっ！ ……あつ、でも、俺、レベルアップなんてしてねえからスキルポイントなんて持ってねえや……」

ボビーは今まで困難に陥っても逃げて何とかしてきた人間だ。そんな人間がレベルアップなどできるはずがない。当然、スキルポイントも0である。

「ククク……。案ずることはない。そのスキルカードには面白い機能が備わっている」

「お、面白い機能？」

「ああ、そのスキルカードは他人のスキルポイントでも使うことができるんだよ」

「お、おおっ！？」 ということは、俺がレベルアップしなくてもスキルポイントは使い放題……っ！」

ボビーは先ほどまでとは打って変わって満面の笑みを浮かべて喜んでいた。しかし、世の中そんなに甘くはない。

「もちろん、他人のスキルポイントを使う場合にはその人の意思でスキルポイントを使うことが前提だ。お前が自由に使えるわけではない」

「で、ですよねえ……」

当然といえば当然である。悪魔からもらったスキルカードといえどもそこまで万能ではないのだ。

「それじゃあこんなスキルカードがあっても宝の持ち腐れですよ。俺なんか貴重なスキルポイントを分けてくれるようなやつ、誰もいませんって」

「そこは自分で何とかするんだな。だが、まあ、今のお前ではそれも難しいかもしれん。特別に俺から一つだけスキルポイントをやろうではないか」

「ええっ！？ い、いいんですかい？」

「今回だけだ。あとは自分で何とかするんだぞ」

「あ、ありがとうございますっ！」

悪魔がボビーに近づいてきて指でスキルカードに触ると、スキルカードのスキルポイントの数値が『0』から『1』へと変わった。

「オススメは魅力だな。長さや太さを多少増やしたところであまり意味はない。魅力ならお前のチンポを見せるだけで女が寄ってくることもあるかもしれないぞ」

「そ、そんなことが……」

「もちろん、魅力を一っ上ただけで寄ってくるような女はその程度の女ということだがな」
「へへへ、それでも今のままじゃ女なんて触ることもできねえんだ。どんな女だって寄ってきてくれるならうれしいってもんだぜ」

「そうか。それならいい」

ボビーは悪魔に言われた通りスキルカードの魅力のところを指でなぞってスキルポイントを使った。ボビーのチンポの魅力が『Gランク』から『Fランク』へと変化する。

「……これ、何か変わったんですかい？」

「見た目にはわからないものだ。だが、確実にお前のチンポは進化している」

「そ、そうですかい……。へへへ……」

ボビーは今まで成長を実感したことがなかった。それがたとえチンポの成長だとしてもこうして成長できたというのは大きなことだった。

「うれしいか。それでは、そろそろ対価をもらおう」

「た、対価……？」

「まさか、これだけのものをもらっておいて何もなしとは思ってないだろう？」

「いや、それは……、その……」

封印を解いたお礼にスキルカードをもらったものだと思っていたボビーは狼狽する。しかし、よく考えれば相手は悪魔なのだ。何の対価もなくこれだけのものをもらえるはずもない。

「そ、それで、対価というのはいったい何でございましょうか……」

「何。簡単なものだ。お前、勇者エグバードとその一行を知ってるな？」

「へっ？ それは、まあ、はい」

「そいつらを潰せ。方法は問わない」

「は、はあああああっ！？ いや、何を言ってるんですかー？ 無理ですよ、相手は勇者ですよー！？ いや、エグバードだけじゃなく、賢者ペルラも剣鬼ソツタも俺なんか敵うわけないじゃないですか」

「普通にやったらそうだろう。だからこそそのスキルカードを渡したのだ」

「ええ……。こんなチンポを強化するだけのスキルカードでどうしろと……」

「あとはお前で考えろ。期限は勇者たちが魔王城へとたどり着くまでだ。もし達成できなければ、その時はお前の命をいただく」

「ひ、ひっ……」

この悪魔ならば本当にそれくらいのことはやってのけるだろう。ボビーは悪魔との契約でチャンスと同時にピンチにも陥ってしまったのだ。

「近くの町までは送り届けてやろう。さあ、もう行け。次に会うときは勇者たちを潰したときか、それともお前の命を奪いに来たときだ」

「……」

悪魔の体中から黒い煙が噴き出す。思わずボビーが目をつむると、次に気づいたときはダンジョンの外だった。太陽が燦燦と照り付けている。

「瞬めは夢だったのではないかと思ったが、今も手にある黒いスキルカードが『あれは現実だった』と語りかけている。

「ど、どうすりゃいいんだ……」

ボビーはその場で頭を抱えてうずくまってしまった。

ボビーはひとまず近くの町へと避難した。砂漠の真ん中で立ち止まっているとどんなモンスターに襲われるかわかったものではない。何をしてもまずは身の安全を確保することだった。「な、何とか生きてたどり着いたか」

しかし、これからどうすればいいかわからない。勇者エグバードたちを潰せというが、正攻法で倒せるわけもない。かといって悪魔からもらった黒いスキルカードはボビーのペニスを強化するだけで戦闘能力の項目は一切ないのだ。これではどうやって勇者を潰せばいいかわからなかった。

「このままじゃ、俺は悪魔に殺される……。いや、エグバードたちを潰そうとしていることを本人たちに知られてもダメだ。どうすりゃいいんだよ、俺は……」

何もわからないボビーだったが、ダンジョンと砂漠を歩いてきた疲労でもう眠気が限界だった。

「とりあえず、寝よう」

ボビーは人目につかない裏路地に行くと、まるで倒れるようにして眠ってしまった。宿屋など無一文のボビーが使えるわけもない。ボビーはこうして人目も気にせず道端で寝るしかなかったのだ。

しばらく眠っていると、何か股間のあたりがムズムズして落ち着かない。ボビーはまだ眠い目をこすりめくろくと起き上がった。

「あっ」

「あっ」

見ると、なぜか駆け出し冒険者らしき女の子がボビーのペニスを握っていた。駆け出し冒険者はすべさまその手を放す。

「す、すみませんっ！」

放しはしたものの、駆け出し冒険者はチラチラとまだボビーのペニスを盗み見ている。これでバレないと思っているのだろうか。

（なんだあ、この女。まさか、痴女か？）

痴女にしては慣れていない様子だった。痴女だとしたらまだ駆け出しの痴女なのだろう。ボビーは素直に聞いてみることにした。

「お前、痴女か」

「ち、違いますっ！」

しかし、先ほどまでボビーのペニスを握っていたのは確かなのだ。その言葉はあまりにも説得力がない。

「私がクエストから戻ってくるぞ、あなたがここで寝ている姿が見え当然了。浮浪者かと思
って近づかないようにしてたんですけど、視界の端にあなたの股間のものが目に入った瞬間、
なぜかフラフラとあなたに近づいて行ってしまったあんなことに……」

「ああ。まあ、俺は寝相が悪いからな。しかもこんなボロボロの服じゃ寝るときにチンポが
はみ出すこともあるだろうよ」

それはいい。しかし、ボビーのチンポを見て近づいてきたという事はやはりこの女は痴女
なのではないか。少なくとも痴女の素質があるのではないだろうか。ボビーはそう思った。

(いや、待てよ。もしかしたら……)

ボビーは懐から例のスキルカードを取り出した。ほぼすべての項目でボビーのペニスは最低
の数値。しかし、あの悪魔からもらったスキルポイントで『魅力』の項目だけFランクにアッ
プしていたのだ。まさか、この効果がこの駆け出し冒険者にあつたのではないか。

(確かめてみるか)

ボビーはわざと駆け出し冒険者に見せつけるようにペニスを曝け出した。

「ああ……」

駆け出し冒険者は魅了されたように恍惚とした表情でボビーのペニスを見つめている。

「このペニス、触りたいか？」

「えっ……？ いや、その……。は、は……」

(この反応、まず間違いないだろう)

ボビーはニヤリとほくそ笑んだ。

「そうか。それじゃあ触らせて——」

(いや、待てよ。もしかしたら——)

ボビーは少し考え込んだ。このままこの駆け出し冒険者にペニスをじかせるのも悪くはない。
しかし、それではそこで終わってしまう。今後この駆け出し冒険者がどうなるかわかるかもこ
れないが、ボビーには悪魔から課された使命があった。そののんびりとしてもいられないのだ。
そして、その使命を遂行できるかもしれない方法を、今思いついた。

「おい、お前、名前は」

「わ、私ですか？ マリー……。マリーといます」

「そうか、マリー。お前、冒険者だよな」

「はい。まだ駆け出しですけど」

「ってことは、レベルアップしてスキルポイントを持ったりするの？」

「えっ？ はい。ちよつと今日のクエストでモンスターを倒してレベルアップしてきたんです
ので、1ポイントだけですけど、持ってます」

「そうか、それはいい」

ボビーは思惑通りだと低く笑う。駆け出し冒険者であるマリーはなぜボビーが笑っているの

かわからず、それよりも早くボビーのペニスを触りたいと思いそわそわしていた。

「マリ、俺のペニスを触りたいということだが、条件がある」

「条件？ 私、お金は持ってませんよ」

「金じゃねえ。いや、金もできればほしいところなんだが、今はそれはいい。お前のスキルポイントをくれ」

「スキルポイント？ でも、スキルポイントって人にあげられるものではないですけど…」

「それは俺のスキルカードがあれば大丈夫だ。それで、スキルポイントをくれるのか？ くないのか？ もしくれば俺のチンポは触り放題だぞ」

「えっ、そ、それは……」

「冒険者にとってスキルポイントというものは非常に貴重なものである。それがなければ冒険者として成長はできず、レベルの高いクエストも受けることはできない。駆け出し冒険者ならなおさらスキルポイントは必要だろう。」

迷っているマリにトドメを刺すべく、ボビーは自身のペニスを大きく揺らした。

「ほっれ、これに触りたいんじゃないのか？」

「あ、ああ……」

ボビーのペニスを魅了されたマリは正常な判断ができない。こんな短小なペニスであっても、性知識のないマリにとってはとても興味深い魅力的なペニスに見えてしまっているのだ。

「もしこのチンポに触りたいのならこのスキルカードに触ってスキルポイントを渡すことを頭に浮かべな。さあ、どっするんだ？」

「う、うう……」

マリは迷っているようだったが、徐々にボビーの黒いスキルカードへと手が伸びていく。そしてついにマリーの指はボビーのスキルカードへと触れたのだった。

「私の、スキルポイントを、渡します」

マリがそつ口にした瞬間、ボビーのスキルカードにマリーのスキルポイントが譲渡された。

「へへへっ、こりゃいい。そうか、こうやってスキルポイントを集めりゃいいんだ」

「そ、そんなことより、もうあなたのそれ、触ってもいいですか？」

「ああ、好きなだけ触りな」

マリはお預けを食らった犬が『よし』の合図を待っていたかのようにボビーのペニスへと飛びついた。初めてペニスを触るのか、興味深そうにボビーのペニスを観察している。

「こ、これが男の人のおチンポ……」

「へへへっ、丁寧に扱えよ。デリケートな部分なんだからな」

「は、はこ」

マリはボビーに言われた通り、貴重なものを触るかのようにペニスを扱う。まだ慣れてい

ないその手つきがボビーをむずがゆくさせていた。

「おい、どうせだから俺のチンポをじじいてくれぬ」

「じじい……とは？」

「手コキだよ、手コキ。そんなことも知らねえのか？」

「え、えっ……。はい、すみませぬ」

「俺のペニスを握って上下に動かすんだ。強く握るなよ。やさしく、丁寧だ」

「は、はい。どう、かな？」

マリーは不慣れな様子で手コキを始める。何とも拙い手淫だったが、それでも弱小チンポであるボビーのペニスにとっては十分な刺激だった。

「い、いいじゃねえか」

「そうですか？　ありがとうございます。でも、これって何の意味があるんですか？」

「今にわかるよ。もっとその上下運動のスピードを上げてみな」

「は？」

マリーはボビーに言われた通り手コキのスピードを上げた。ボビーのペニスは小さいのでマリーの手——ほぼ親指と人差し指だけ——は楽に動かすことができる。だからこそ性経験の乏しいマリーでもなんとか形になっているようだった。

「うん……。で、出る……っ！」

「出るって、何が——きゅあっ！」

ひゅんぬるっ！

ボビーはマリーの手コキで射精した。しかし、その精液の勢いも量も少なく、水のように薄いものだった。性経験の豊富な女性が見れば、こんな射精など鼻で笑ったことだろう。

しかし、マリーは違った。

「な、何、これ……」

精液を初めて見るのか、興味深そうに自分の手に付着した液体をいじっている。

「へへへっ、それが精液ってやつだよ。今のが射精だ」

「精液……。射精……」

スキルカードで上昇させた魅力の効果なのか、こんな水のような精液でもマリーは興奮した様子で眺めている。この調子ならマリーからもっとスキルポイントを集めることができるかもしれない。

「なあ、マリー。今度はお前が気持ちよくなってみないか？」

「えっ？　わ、私が？」

「ああ。男はこうしてチンポをいじられると気持ちよくなって射精するんだが、女も同じように気持ちよくなることできるんだぜ」

「そ、そんなことができるんですか？」

「ああ、俺が気持ちよくしてやってもいいんだが……」

ボビーの意味深な言葉にマリィは生唾を飲み込む。かなり興味を持っているようだ。

「お、お願いします」

「へへへっ……。それじゃあ、ちょっと待ってな」

ボビーは例のスキルカードを取り出すと、マリィからもらったスキルポイントである項目をランクアップさせた。その項目とは、『テクニック』だった。GランクだったボビーのテクニックはFランクへとアップする。

「よし、いいぜ。それじゃあ、まずはそのおっぱいでも揉ませてもらうかな」

「お、おっぱいですかっ？ そんなんで気持ちよくなるんでしょうか」

「俺を信じな」

ボビーはまだむき出しのペニスをぶらんと揺らしてマリィの思考を奪う。マリィはペニ스에魅了されてボビーの言いなりになってしまった。

「まずはその防具と服を脱いでおっぱいを出してもらおうか」

「は、はい……」

マリィはボビーの言う通りにその形のいいおっぱいを曝け出した。

「へへへっ、それじゃあ……。いただきますか」

「あんっー」

ボビーは荒々しくマリィのおっぱいを揉みしだく。テクニックがアップしたといっても、それは最低ランクの『G』から一つ上の『F』に上がったただだ。まだ一般的に見ればボビーの性技術は下手な部類であろう。しかし、性経験のないマリィに対してはそれでも十分だったのである。

「なんだか、変な気分……」

「それが気持ちいいってやつだぜ。もっと味わいな」

ボビーはおっぱいを揉みながら片手をマリィの股間のほっへと伸ばしていった。そして不意打ちのようにマリィのマンコへと指を突き入れる。

「ああんっー」

マリィは稲妻に打たれたように身体を震わせた。まったく予想していなかった場所への刺激に、マリィの脳は快感でいっぱいになる。

「へへへっ、ごっだ。気持ちいいだろっっ」

「は、はい……。なんか、胸の奥が熱くなる感じがします……」

「もっと気持ちよくしてやることもできるんだが――」

ボビーは急にマリィから手を放し、距離をとった。あまりに突然なことにマリィは茫然とする。その火照った身体の熱はぐっすらと沁みこみできず、潤んだ瞳でボビーを見つめることしかできなかった。

「あ、どうして……」

「へへへっ……。最後までしてほしかったら、さっきみたいにスキルポイントを持てきな。そうすれば今以上に気持ちいいことをしてやるぜ」

「そ、そんな……。スキルポイントはレベルアップしたときにしか手に入れない貴重なもので……」

「そんなことはわかってんだよ。それで、どうするんだっ」

「へ、へっ……」

これはボビーにとっても賭けだった。もしこの作戦がうまくいかなかったら、スキルポイントを集める方法がなくなってしまう。しかし、うまくいけば自分の力を使わずにスキルポイントを集めることができるのだ。これほどおいしい作戦はない。

「わ、わかり、ました。また、スキルポイントを持てきます」

（やったぜ）

ボビーは内心大笑いした。

「それじゃあまた明日だ。俺はこの時間にここにいるから、それまでにレベルアップしてスキルポイントを集めてくるんだな」

「は、はい……」

マリーは熱い吐息を漏らしながら夜の街の中へと消えていく。それをボビーはにやけた顔を見ながら見送った。

（そうか、そういうことだったのか。やっとわかったぜ、このスキルカードの使い方が）

黒いスキルカードを使えばボビーのペニスを強化することができる。その強化したペニスで女を堕としていき、スキルポイントを集めてさらにペニスを強化する。こうしていけばボビーのペニスは際限なく男らしくなるだろう。そして、その強化されたペニスで勇者のパーティの一員であるペラとソッタを堕す。それだけでも十分戦力の削減になるだろう。

（しかしせっかくだ。あのいけないエグバードの野郎にも一泡吹かせてやる。いや、どん底にまで突き落としてやるよ）

ボビーは堪え切れず、一人不気味に笑うのだった。

翌日、日が落ちてからボビーが昨日と同じ場所で待っていると、防具をボロボロにしたマリーが現れた。すでにその顔はほのかに赤くなっており、早くもボビーとの性行為を期待しているのが見て取れた。

「や、約束通り、スキルポイントを持てきました」

「へへへっ、やるじゃねえか。その様子だと相当がんばったみたいだな」

「はい。3ポイント、あります」

つまり一日でレベルを3つも上げたということだ。駆け出し冒険者であるので比較的レベル

は上がりやすいということではあるが、それでも驚異的なレベルアップの速度である。相当無理をしたといふことだ。

「ようし、いいぞ。全部よこせ」

「は、は」

多少は戸惑うかと思ったが、どうやらマリーはもう発情していて限界のようだ。早くボビーに気持ちいいことをしてもらいたくて仕方がないらしい。素直にボビーのスキルカードに指を置いてスキルポイントを譲渡する。

「へへへっ、いいじゃなか。こいつでいろいろできるみたいになったぜ」

今すぐスキルポイントを使うということもできたが、どうせならじっくりと考えてこの項目をスキルアップさせるか考えたかった。

（まあ、まずは目の前のマリーに褒美を与えてやるか）

「昨日の続きだ。まずは防具と服を脱ぎな」

「は、はい……っー」

マリーはつい「褒美がもらえると言わんばかりに急いで防具と服を脱ぎだした。夜の街に上半身裸の女性が立つことになる。

「それじゃあ、いただきますっ」

「あんっー」

ボビーはマリーの後ろから胸を揉みしだした。乳首を中心にこねくり回すように胸をいじると、マリーの顔は見る見るうちに赤く染まっていく。

マリーのおっぱいは小ぶりだが、形がいい。成長すればもっといいおっぱいになることが予想された。

「気持ちよさそうだな。それなら、こっちもいじってやるよ」

ボビーは前回と同じように片手をマリーの股間へと伸ばしていき。マリーは拒否するといふなく、ボビーの伸ばした手を受け入れた。

「それっ、いいっー」

「へへへっ、そうだろうっ」

ボビーはまずマリーのクリトリスを触ってみた。まだ手探り状態で探るような荒々しい手つきだったが、それでもマリーには十分な刺激だったようだ。

「俺のテクニックで女がよがってやがる。なんて気持ちがいいんだっー」

今まで底辺は這いすり回ってきたボビーにとって、自分が主導権を握るという快感は何とも言えない悦楽だった。確かに金で買った女を抱いたことはあったが、それでもここまで女を喜ばせたことはない。それもそのはずで、ボビーは黒いスキルカードがなければ今も最底辺のセックス下手な男のままだったのだから。

「このままイかせてやってもいいが、こいつにはお礼も兼ねてもっと気持ちよくなってやるか」

ボビーは一度マリーから手を放し、黒いスキルカードを取り出した。マリーから譲渡された3ポイントのうち、1ポイントを使って再び『テクニク』の項目を強化する。FランクからEランクへとランクアップした。

「ちあて、いねでいねくらい変わるかな」

ボビーは片手でおっぱいを責めつつ、もう片方の手の指をマリーのマンコに突き入れた。

マリーは身体をのけぞらせて快感を享受する。

「おおっ、わかる。わかるぞ。ここがこうなっていて、ここをこつやって擦ると気持ちいいんだろっつー」

「あっ、あっ、あああんっ！」

マリーはボビーの問いに答えられないほどよがっていた。しかし、その反応がボビーへの答えとなる。ボビーからそれだけで十分だった。

「も、もう、ダメ……。何か、来そう……」

「いいぜ。それが『イク』ってことだ」

「ヤ…」

「イノときは、大きな声で言うんだぜ」

ボビーはそう言うてトドメを刺すようにおっぱいと膣内を責めたてた。

[illegible]

夜の街にマリーの声が響き渡る。この声でボビーたちが何をしているのか気づいた人たちもいることだろう。

「へへへっ、どうだ。気持ちよかっただろう？」

「はあ、はあ、はあ……。さ、最高、でした……」

マリーはあまりの気持ちよさに気を失ってしまった。

「へへへっ、こんなエロいことをしてスキルポイントを集められるなんて最高じゃねえか。よし、この調子で俺のチンポを強化して、最強のチンポにしてやるぜ。そしてあのむかつくペルラとゾッタ、そしてエグバードを……」

ボビーは今後のことを思い不気味に笑う。ボビーの頭の中ではエグバードたちへの復讐の道が開かれたようだった。

第三章 中堅魔法使い・フェラ

「きよ、今日もスキルポイントを持ってきました……」

「ハハハっ、よくやった。褒美をやるから、股を開きな」

ボビーが黒いスキルカードを手に入れてから数日経った。今日もマリーに無茶なレベルアップをさせてそのスキルポイントを奪っていたのだが、さすがに何日も連続してレベルが上がるわけもない。初日は3ポイントあったスキルポイントも、今日は1ポイントしか手に入れることができなかった。

（さすがにこれ以上こいつでスキルポイントを手に入れるのは無理か。死なれても困るし、新しい奴隷を手に入れないといけねえな）

ボビーはマリーのマンコをいじりながら考え込む。この数日で上昇したボビーのセックスステータスは以下の通りであった。

名前	ボビー
長さ	6センチ
太さ（周径）	4センチ
精液量	Gランク（最低）
持続時間	Fランク
テクニック	Eランク
魅力	Cランク
保有スキルポイント	1

とりあえず魅力を上げれば女は寄ってくると思ったボビーは集中して魅力をランクアップさせていた。そのおかげで今のボビーのペニスは一平均以上に魅力的に見えることだろう。しかし、その他のステータスはあまり変わっていないので、完全に見ただけよくて中身が伴わないハリボテチンポである。いや、長さや太さは変わっていないのでハリボテにすらなっていないのかもしれない。

「おらっ、イけっー」

「イクぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっー」

マリーは人目もはからず絶頂を宣言した。この快感はオナニーでは手に入れないものなのであろう。

「はぁ、はぁ、はぁ……。あの、もっと私のアソコをいじってもらえませんか……?」

「ああん? 今日はいポイントしか持ってきてねえだろう。だったら手マンも一回だけだ」

「そ、そんな……。私、もつなかなかれベルが上がらなくなってきました。スキルポイント

以外なら何でもしますんで、もっと私に快感をくださいっ！」

「だから、俺はスキルポイント以外はいらん——」

ボビーは言いかけた言葉を飲み込んだ。ここまでボビーに依存している女だ。スキルポイント以外にも使い道があるのではないだろうか。

「……おい、何でもすると言ったな」

「は、はい。スキルポイントはもつないですけど、それ以外なら……」

「それなら、スキルポイントを貯め込んでるような冒険者はいねえか。女の冒険者だ。美人であればなおさらいい」

「美人でスキルポイントを貯め込んでいるような冒険者ですか……。うーん、私、冒険者になっただけで他の冒険者のことはよくわからないんですよね」

「だったら聞き込みをしても調べてくるんだな。もし俺が満足するようなやつを見つけてきたら、そのときは存分に気持ちよくしてやる。もしかしたら今以上に気持ちのいいことがあるかもしれないねぞ」

「ほ、本当ですかっ？ 私、がんばりますっ！」

「ああ、せいぜいがんばれ」

通常冒険者が行う情報収集もマリィのようなボビーのようなペニスに魅了された女にやらせればいい。黒いスキルカードは使い方次第で本当に何でもできる魔法の道具のようであった。

翌日、早くもマリィはボビーが気に入るような女冒険者を見つけてきた。

「名前はメリッサ。中堅の魔法使いです。レアな上級魔法を取得するためにスキルポイントを大量に集めているそうですよ」

「なるほど。で、そいつは美人なのか？」

「冒険者ギルド内ではトップクラスの美人です。メリッサさんがこの短期間で中堅までのし上がったのも、多くの男性冒険者のサポートがあったからという噂ですよ」

「なるほど。男を利用してのし上がってきた女か。そういう女を俺が利用するのも悪くねえ」
ボビーは今までさんざん強い男や女に利用されてきた男だった。そういう男が逆に強い女を利用する。立場を逆転させて復讐することもできるかもしれない。

「そのメリッサとかいう魔法使いのことは知らねえが、うっぶん晴らしいはちょっといいぜ。よし、その女にしよう。今から連れてこられるか」

「やってみます」

マリィもボビーから与えられる快楽のためなら何でもする。すでに辺りは暗くなっているが、何かと理由をつけてボビーのもとに連れてくるのだろう。そこはマリィに任せしかない。

十数分後、ボビーのいる裏路地に不機嫌そうな女の声が響いてきた。

「まったく、何で私があんたのクエストを手伝わないといけないのよ」

「申し訳ございません。お礼はたっぷりしますので、どうかよろしく願います」

「当り前よ。それに、レベルアップやスキルポジション以外にスキルポイントを得られるアイテムがあるっていう話 本当でしょうね。もし嘘だったらただじゃおかないわよ」

「は、はい。この目ではっきり見ましたから、それは本当です。今回のクエストもそれに関係しているんで、そこは大丈夫かと」

「ふんっ。それならいいんだけど」

話し方からしてプライドの高い女なのだろう。しかし、それなりに気品はありそうだった。

「それで、こっちにいるのかしら？ そのレアアイテムを奪った盗人は」

「そつだと思えます。目撃情報はこのあたりに集中していますから」

「そこまでわかってるなら自分でやりなさいよ」

「いえ、私のような駆け出し冒険者では勝てるか不安で……」

「まあ、あんたみたい駆け出し冒険者がいるおかげで私たちのような中堅がいい思いできるんだけどね」

どうやらマリーは盗人討伐のクエストを手伝ってもらったという名目でメリッサをここまで連れてきたようだ。あながち間違ってもいないのでボビーも苦笑を禁じ得ない。

(それならそれらしく振舞ってやるか)

ボビーは気合を入れてメリッサたちの前に躍り出た。

「おっと。お前たち、ここは通行止めだ。通りたければ金を置いてきな」

「……はあっ」

ボビーとしてはそれっぽく振舞ったつもりなのだが、なぜかメリッサは気の抜けた声を出す。悲鳴をあげたり戦闘態勢に入るわけでもない。

「ちょっとマリー。まさか、これが例のレアアイテムを持ってるっていう盗人なの？」

「そ、そのはずだよ」

「はあ……。こんなザ、私が出るまでもないじゃない。レベル1の駆け出し冒険者でも倒せるわね」

メリッサに馬鹿にされて、さすがのボビーもむっとした。この女は自分の立場をことんわからせないといけないようだ。

「おいおい、そんなこと言っているのか？ 俺はお前のようなやつを待ってたんだよ」

「何っ 私を襲ってレイプでもするつもり？ お生憎様、私はあんたみたいなザにレイプされるほど弱くないわよ」

「確かに戦闘では俺はお前に敵わないだろうよ。でも、こっちのほうはどうだろうなあ？」

ボビーは自らのペニスを外気にさらす。小さい包茎ペニスがメリッサの前に曝け出された。

「びっ。何々わ。そんなチンポを自慢げに出すなんて。あんた、よっぽどのバカなんじゃ——」

ボビーのペニスを煽っていたメリッサの言葉が次第に小さくなっていく。なぜか視線がボビ

ーのペニスから離れなかった。

(魅力のランクでどうかと思ったが、どうやら何とかなりそうだ。この女、大した性経験もないようだぜ。それがアタとなったな)

言い寄ってくる男は多いという話だったので、男は利用してその都度捨てていたのだらう。そのツケが今になって現れたとも言える。

「へへへっ、どうした。さっきまでの威勢はどこに行ったんだっ。」

「な、何でもないわよっ！ それよりも、あんたが目的の盗人なんだから倒させてもらっわ。私の魔法なら一撃よ」

「いいのか？ 俺を倒しちまうとこのチンポを味わえなくなるぞ」

「そ、そんなものいらな——」

メリッサは会話の途中なのにまだしても呆けたようにボビーのペニスを見つめている。完全にペニスを魅了されている顔だった。

「無理するな。お前の言う通り俺とお前の実力差は明白だ。その気になれば俺は一瞬でやられることだらうよ」

「そ、その通りよ」

「だからよお。だったら今すぐ倒す必要もねえじゃねえか？ このチンポに興味があるんだらう？ これを存分に味わってから俺を倒すなり逃げるなりすればいいじゃねえか。お前にはそれだけの実力があるんだから」

「……」

メリッサは考え込んでいる。いや、考え込んでいる『フリ』をしている。メリッサの視線はずっとボビーのペニスに釘付けた。答えはもう決まっているはずなのに、すぐに返事をしてしまっではがっついていいるようではしたくない。そんな打算的な思考がメリッサの行動にブレーキをかけていた。

「どうした。考えることじゃねえだらう。ほれほれ」

ボビーは無防備にもメリッサに近づいていく。いや、魔法使いであるメリッサからすれば、ボビーを倒そうとすれば距離などほとんど関係ないだらう。しかし、メリッサは魔法を放つ気配も見せずにただボビーの接近を許していた。

そして、ついにボビーはメリッサに手が届くところまで近づいた。

「ほら、触ってみるよ」

「……っ！」

ボビーは無理やりメリッサの手を自分のペニスにあてがった。メリッサは抵抗している形を作ったが、それはあまりにも弱々しく、抵抗の意思はほとんど見られない。

「な、何するのよ」

「どうした？ 触ってみると結構いいものだらう」

「……」

ボビーのペニスは小さくてとてもいいものとは言えない。しかし、黒いスキルカードのおかげで魅力が増大しているために、それでもメリッサには素晴らしいもののように感じてしまうのだ。

「た、大したことないわね。こんな短小チンポ」

「そうかよ。それならしょうがねえ。おい、マリ―」

「はっ」

マリ―はボビーに呼ばれてどこと近づいて行った。その様子にメリッサは自分は騙されていたのだと気づく。

「あんた、最初からそっちの仲間だったのね」

「っ、ごめんなさい。でも、しょうがなっただです。だって――」

マリ―はボビーのペニスを握って愛おしそうにじゅわ。

「このおチンポの魅力には敵わなかったんですから」

マリ―が熱心にボビーのペニスをじゅわ様子を見て、メリッサは生唾を飲み込む。同性のマリ―がこんなになるほどあのペニスはすごいのだろつかという考えがメリッサの思考の隙間に入るんだ。

「ねえ、ボビーさん。お願いですから、私に精液をください」

「へへへっ……。それでもいいが、その魔法使いが優先だ。おい、本当にこのチンポいらねえのか？　いらねえならこの女にやっちゃまっぞ」

「な、何を……」

これが最後のチャンスとばかりにボビーはメリッサに自分のペニスを誇張する。メリッサにはその短小ペニスがこの世で最も愛しいもののように見える。

「す、少しだけなら、触ってあげてもいいわよ」

「へへへっ……。この期に及んでそのプライドの高い言葉が気に入らねえが、まあ、よしとしよう。いーげ、触るな」

ボビーはマリ―を押しつけ、ペニスをメリッサのほうに向けた。

「ああん、私のおチンポ」

ようやくボビーのペニスを触れることができると、メリッサの頬は紅潮した。目の前に来たボビーのペニスに、ゆっくると、慎重に手を添える。ドクンドクンという血潮をその手のひらで感じ取った。

「こんな小さなチンポでも血が通ってるのね」

「当り前だ。それで、どんな気分だ？」

「どんな気分って、別に……」

メリッサはプライドが邪魔して素直になれないが、その手はボビーのペニスを握って放さな

い。それがメリッサの心情を端的に表していた。

「むっせなら口にくわえてみたくなえか？」

「これを、口にっ」

しまのフェロをいだくのかというところである。フェロはマイリーですいまだじじがなご。だからこそマリーはボビーの言葉を聞いてやや不機嫌そうな顔をしたのだ。

「そんなこと、できるわけ……」

「ものは試した。やってみるよ」

「えっ、あっ、ちょっと」

ボビーは強引にメリッサをひざまずかせ、ペニスを顔に近づける。メリッサはボビーのペニスの臭いを直に嗅いでしまった。

「うっ、臭い……」

「確かにここ最近身体を洗ってねえからなあ。臭いは強烈だろうよ」

「不潔……。最低……」

「へへへっ……。それならどうしてすぐに顔を離さねえんだ？」

ボビーが指摘した通り、メリッサは臭いと言いながらもまだその臭いを嗅いでいた。本当に嫌悪感を抱いているならすぐに離れるが、少なくとも顔をそむけるはずだった。

「別に誰も見てねえんだ。俺もお前も、そこにいる女もここであったことは誰にも話さねえよ。

だからお前の好きなようにすればいいんだ。ほれ、少しでもこのチンポを舐めてみな」

ボビーの言葉が毒のようにメリッサの心に沁み込んでくる。メリッサはその毒に抗うことができない。

「す、少しだけだからね……」

メリッサは舌をチロリと出してボビーのペニスの先を舐めてみた。しびれるような苦みがメリッサの舌先を刺激する。

「まっっー」

「おいおい、ひでえやつだな。それに、本当にまずいだけか？」

「当の前でしよう。こんなチンポ、まずいだけで……」

メリッサはそう言うものの、再びボビーのペニスを舌先をつける。

「やっばりまずい……」

「へへへっ……。その割にははっきより表情が緩んでるじゃねえか。本当はそのまずさが癖になってきてるんだろっ」

「そ、そんなわけないでしょっっー」

「無理するな。今度はくわえてもいいんだぜっ」

「……」

メリッサはボビーの言う通りおすおすとしてペニスをくわえてみた。小さなペニスがメリッサの

口の中にすっぱり収まる。

「うん……。やっぱり、見た目通りの小さいわね」

「ちっ、満足とはいかねえか」

「当の前でしょう。こんな短小チンポをくわえたところで満足するわけないわ」

やはりペニスの魅力だけではここまで限界のようだ。しかし、ここであきらめてしまえばこれ以上スキルポイントを集めることができない。では、どうするか。

（多少強引だが、やってみるか）

ボビーはあらかじめ考えていた策を試してみることにする。

「おい、これが何かわかるか？」

「何それ。黒い、スキルカード？」

「ああ、そうだ。こいつは普通のスキルカードとは違う。チンポの強さを表すスキルカードなんだ」

「な、何よ、それ……。そんなバカみたいなスキルカードがあるんですか」

「証拠を見せてやるよ。今お前は、俺のチンポを短小だと言ったな？」

「ええ、そうよ。誰がどう見たって短小チンポじゃない」

「仮にだが、どのくらいの大きさならお前は満足するんだ？」

「えっ？ それは、その……」

まさかそんなことを聞かれると思っていなかったメリッサは動揺する。しかし、ここで答えないのもボビーに負けたような気がして嫌だった。妥協策としてメリッサが満足できるペニスの大きさを手で表した。

「このくらいよ」

「へへへ……。だいたい20センチくらいか？ すいぶんかいチンポが好きなんだな」

「べ、別にいいでしょうっ！ それよりも、私にこんなことを聞いてどうするつもりよ」

「そつだな。違いがはっきりわかるように俺のペニスを口の中に入れておけ」

「はあ？ また何で……」

「証拠を見せると言っただろう。ほれ、早くしろ」

メリッサは納得していないようだったが、興味はあるようで素直にボビーのペニスを再びくわえる。やはりメリッサが満足するには程遠い短小ペニスだった。

「それじゃあ、しっかり俺のチンポを感じてろよ」

ボビーは黒いスキルカードの『長さ』の項目に注目した。現在ボビーのペニスの長さは6センチ。そこにスキルポイントを使って長さを変化させたのだ。1ポイントを消費し、ボビーのペニスは1センチ長くなった。

「ん？ んんっー？」

たった1センチだが、それでも口の中にくわえこんでいたメリッサにはボビーのペニスの変

化がよくわかった。確かにボビーのペニスはこの一瞬で長くなったのだ。

「どうだ。長くなっただろう？」

「……確かに変化したかもしれないけど、この程度じゃあまり変わらないわよ」

「そうだ。その通りだ」

ボビーはメリッサの言葉を肯定する。まさかそんなことを言われると思っていなかったのでメリッサは面を食らった。

「でもな、このスキルカードにはもう一つ秘密があるんだよ。それは、他人のスキルポイントでも俺のチンポを強化することができるってことだ」

「えっ？ それって——」

「ああ、そうだ。ところでお前、今スキルポイントはいくつ持ってるんだ？」

「……っ——」

「ここにきてようやくメリッサはボビーの狙いがわかった。初めからボビーは金やメリッサの身体が目的ではなく、スキルポイントが欲しかったのだ。しかし、それがわかっててもメリッサはボビーのペニスの魅力から離れることができない。

「そ、それは……」

「ここで保有スキルポイントを言ってしまうえばボビーに屈するようなものだ。メリッサは最後の抵抗としてそれだけは阻止しようと抗っている。しかし、それを無に帰すような行動をとる人物が一人——」

「メリッサさん、確かここにスキルカードをしまっていましたよね」

「えっ？ あ、ちよっとっ——」

隙を見てマリーがメリッサの懷からスキルカードを奪い取ってしまった。いつものメリッサならばこんなミスはするはずないのだが、やはりボビーのペニスに魅了されているというのが大きかったのだろう。

「よし、持ってい。どれどれ……。おっ、こいつ、20もスキルポイントを貯めてやがるじゃねえか。こんなに貯めてどうするつもりなんだよ。ああ、そういえばレアな上級魔法を取得するつもりなんだっけか」

レアな魔法を取得するにはかなりのスキルポイントが必要とする。この様子では最上級魔法でも取得するつもりだったのか。

「おい、お前。このスキルポイントを使って俺のペニスを強化してくれよ」

「な、何をバカなことを言ってるのよっ！ 貴重なスキルポイントをそんなことに使えるはずないでしょっっ——？」

「まあ、そうだな。でも、お前もこのままじゃ俺のチンポに満足できないだろう？ だから、少しだけ……。お前が満足する長さになるまででいいから、俺のチンポを強化してくれよ。そうすれば俺もお前も満足できるじゃねえか」

「す、少しだけ……」

「そつだ。少しだけだ。少しだけならまだすべに貯めることができるわ。いいで我慢するよりも、少しだけ使って今快樂を得たほうが賢い使い方だと思うぜ。お前くらいの冒険者ならヘルアップ以外にもアイテムとかでスキルポイントを集めることができるんだろっ？　なんともなるわ」

「……」

普段のメリッサならばこんなボビーの譏言に惑わされることはなかっただろう。しかし、今のメリッサはボビーのペニスに魅了されている。このペニスでもっと気持ちよくなれるのならスキルポイントを少し使っくらいなんとも思わなかった。

「す、少しだけだからね」

「ああ、少しだけだ」

ボビーは思惑通りに事が運んで笑みをこぼす。

メリッサはボビーが差し出した黒いスキルカードに指を置いた。念じただけでスキルポイントが5ポイント移動する。たった5ポイントかと思うかもしれないが、マリーのような駆け出し冒険者から見ればスキルポイントを一度に5ポイントも使っなんて贅沢にしか見えない。

「強化するのはチンポの長さでいいのか？」

「え、ええ」

「へへへっ、いいぜ。長さにスキルポイントを5個っと」

ボビーのペニスの長さが7センチから12センチへと変化する。さすがに5センチも長くなるとその変化は一目でわかるものだ。しかし、それでもようやく人並みの長さほどではあるが。

「ほれ、でかくなった俺のチンポだ。くわえてみるよ」

メリッサはボビーに命令されるのは納得がなかったが、それでも欲望には抗えず、素直にボビーのペニスを口の中に入れた。先ほどよりも確実に長くなっているペニスにメリッサの口は歓喜する。その証拠に、先ほどまでより多くのよだれが垂れてきていた。

「どっだっ。これで満足か？」

「……確かにさっきよりは立派になってるみたいだけど、まだまだ足りないわね。この程度のチンポ、どこにでもあるわよ」

「だったらもう8ポイントよこしな。そうすればお前の要望通りの20センチになるぜっ」

「そ、そんなにも渡せるわけじゃないでしょうっ！？　スキルポイントは貴重なのよ」

「へへへっ、よく考えてみるよ。確かにスキルポイントは貴重だが、20センチのペニスも貴重だと思わないか？　今のお前は俺のペニスを自分の好きな形にできるんだぜっ。こんなチャンス、もう訪れないかもしれねえんだぜっ」

「……」

確かにボビーのもののように急速に変化するペニスというのはほかにないだろう。メリッサ

にも性欲というものはある。その性欲を満たすだけのペニスを、自分の手で作れるのだ。

「あと、8ポイントだけだからね」

「へへへっ、話がわかるじゃねえか」

メリッサは先ほどと同じようにスキルポイントをボビーに譲渡する。残りのスキルポイントは7ポイントになってしまったが、それでもあまり後悔はなかった。それよりも早く理想のペニスというものを見てみたいという欲望が勝っていたのだ。

ボビーはメリッサの要望通りペニスの長さを20センチにした。ここまで来たらもう立派なペニスだろう。しかし、太さは変わっていないのでどうもひよる長いやせ細ったペニスという感が否めない。

「おい、これじゃあ格好がつかねえだろう。残りのスキルポイント全部よこせ。太さも強化してやるよ。それで理想のペニスは完成だ」

「でも……」

「ここまで来たら最後までやるしかねえだろうっ」

「……」

メリッサは黙ってスキルポイントを渡した。それはボビーのペニスに陥落した証拠でもあった。

「へへへっ……」

ボビーはペニスの太さを4センチから11センチへと増加させた。これでようやく平均的なペニスの太さになったということになる。しかし、長さは20センチもあるためかなりの威圧感があるだろう。

「どうだ、これで俺のペニスも立派になっただろうっ」

「す、すっ……」

さすがのメリッサもここまでのペニスはなかなか見たことがない。しかもこのペニスを作ったのは自分のスキルポイントなのだ。このペニスは自分のものだという執着が生まれてしまうのも仕方がない

「も、もちろん舐めていいのよねっ」

「ああ、当然だ。舐めろ」

メリッサは先ほどまでは打って変わって積極的にボビーのペニスを舐め始めた。もはや最初のころの逡巡などなかったかのようである。

チロチロと舌先で舐めていたメリッサだったが、我慢できなくなったのか大きく口を開けてボビーのペニスを一気に口の中に入れた。

「ほ、ほほひい……（お、大きい……）」

先ほどまでは口の中にすっぽり収まっていたペニスなのに、わずかな間にメリッサの口では収まらないほど太く長くなった。これだけの凶悪なペニスならメリッサも十分満足できるだろう

う。

「へへへっ……。チンポがでなくなったからか、気持ちよさも大幅アップだぜ」

単純に小さいペニスと大きいペニスだと女性と接触する面積が大きく違う。それがボビーにとっても気持ちよさの違いとして現れた結果と言えた。

「よし、動きな」

ボビーのペニスが巨大化した影響か、メリッサはかなり従順になってきている。まるでペニスの大きさが男としての強さの証であると理解しているようであった。

ジュポッ、ジュポッ、ジュポッ。

「いいぜ。その調子だ」

メリッサがペニスをくわえたまま頭を前後に振ると、ボビーの腰も同じように前後に揺れた。まだ二人とも慣れていなくてタイミングが合わないこともあったが、どちらも性経験の浅いもの同士だ。それはそれでそれなりに楽しんでいるようである。

「いーぞ、出そうだ」

「ほ、ほうっー？(も、もっっーっ)」

「で、出る……っー」

びるるるっー

ボビーはメリッサの口の中に精液を吐き出した。しかしその量は少なく、水のように薄い。

「ぶはっ……。我慢のなさも精液の量も粗チンのままなのね」

「あ、ああ。そこはまだ強化してねえからな。でも、これからもっといいチンポになると思うと興奮しねえか？」

「……」

メリッサは無言で答えた。否定しなかったということは肯定したのと同じようなものだ。すぐに魔法でボビーを倒したり逃げたりしないのがその証拠と言えよう。

「へへへっ……。俺に協力したらお前をもっと気持ちよくしてやるよ。せっかく貴重なスキルポイントを全部つき込んだんだぜ？ 自分の欲望に素直にならなきゃ損だ」

「それも、そう……。ね。いいわ。協力してあげる」

「さすが。話がわかるぜ」

「でも、私が満足できなかったらすぐにでも殺すから、覚悟しなさい」

「へへへっ……。わかってるよ。怖い女だぜ」

こうして、マリーに続いてメリッサもボビーの協力者となった。しかし、ボビーの目標はペニスを強化するところではない。どこかにいる勇者パーティを壊滅させることが目的なのだ。これはそのための準備にすぎない。

(い)の調子でいけば、今でも十分ペルラやソッタをメロメロにできるんじゃないか？)

マリーやメリッサを攻略して、ボビーは少し慢心してきているようであった。

第四章 道真屋・パイズリ

ボビーがメリッサから大量のスキルポイントを奪ってから数日が経った。そのころ、勇者パーティがボビーのいる町にやってきた。もちろんエグバード、ペルラ、ソッタの三人のことである。

(うげっ、本当にこの町にやってきやがった)

ボビーが落とし穴にはまって勇者パーティと別れたあのダンジョンからこの町が一番近いので当然と言えば当然であろう。補給や休息などのことを考えると、この町に寄らないという選択はほばない。

今ならペルラやソッタを進化したボビーのペニスで墮とせると思っていたのだが、今までのこともあり確信を持ってない。次に三人に会うときは再びあの地獄のような荷物持ちに戻る可能性もあるということがボビーの心に影を落としていたのだ。

だが、このまま見逃すというのもいい手とは言えなかった。いつかは勇者パーティを壊滅させなければボビーは悪魔に殺されてしまうのだし、ここで見失ったらまたどこで見つけることができるかわからなかった。これはピンチであるとともにチャンスでもあったのだ。

(や、やるしかねえ……っ！)

ボビーは覚悟を決めてエグバードたちの前に躍り出た。

「ん？ お前は……」

「どいづつも……」

以前のことと身体にまでしみついているので、どうもオドオドとした態度になってしまっ。それも仕方がないことであった。

「ああん？ なんだ、ボビーじゃねえか。お前、生きてたのかよ」

真っ先に近づいてきたのはいつもボビーをイジメていたソッタだった。

「な、何とか……。へへへっ……」

「だったら何ですぐに私たちのところに戻ってこなかったんだよ。お前がいなくて誰がこんな重い荷物を持ってたと思ってんだ」

「す、すみません……」

もともと荷物の大半はソッタたちのものだ。それをボビーが持つ義理なんてまったくない。以前も脅されてなければ逃げ出していたはずだ。

「まあ、戻ってきたならいいや。ほら、お前の仕事は荷物持ちだ。私たちの荷物を持ちな」

「へ、へこ」

ソッタに続き、エグバードとペルラもボビーへと自分たちの荷物を持たせる。それが当然とばかりに誰も異議を唱えなかった。

「ちなみに、この町にはどのくらい滞在の予定でっ」

「まあ、一週間くらいかな。ダンジョンに潜った疲れも取りたいし、しばらくはゆっくりするつもりだ」

「一週間……」

一週間もあればなんとかなるかもしれないとボビーは希望を持つ。ペルカソッタも一週間で必ずどこかで隙を見せる。その隙について、進化したボビーのペニスで墮とすのだ。それができなければ、荷物持ちどころか命が危ない。

この一週間が、ボビーにとって運命の一週間になりそうだった。

エグバードたちは町の宿屋に泊まってゆっくりすることにした。しかし、ボビーがエグバードたちと同じ部屋に泊まれるはずもない。ボビーだけ一番安い物置小屋のような部屋に押し込められた。

（ちっ、やっぱりこつこつ扱いかよ）

しかし、今はそれがありがたかった。監視役がないのはボビーが自分で戻ってきたのを多少は信用しているということなのだろう。エグバードたちと一緒にの部屋にいては一人で行動できない。目的を果たすためにはどうしてもボビーは一人になる必要があったのだ。

ボビーは荷物を部屋に置くと、宿屋の構造を確認した。この宿屋には一つだけ風呂場がある。風呂場なので当然湯気を逃がすための窓も設置されていた。

「これだな」

ボビーは思い通りの場所に思い通りのものがあり、ニヤリと笑った。
夜になり、エグバードたちは順番に風呂場に入ることになる。

「私が一番でいいか？」

「はい。いいですよ」

「俺は最後に構わない」

「サンキュー」

まずはソッタが最初に風呂場に入るようだ。それをボビーは風呂場の窓の外で待ち構えていた。
「やっぱり風呂場が一番風呂場だよなあ。……んっ」

真っ先に風呂場に入ってきたソッタだったが、すぐに風呂場の格子窓に何かがあることに気づく。棒のような何か。それはボビーのペニスだった。

（へへへっ……。さすがにマリーやメリッサのように真正面からチンポを見せて魅了されなかつたら殺されるからな。こつこつやってますはでっへん効果があるか確かめてやるこつこつじゃねえか）
ボビーはいくぶんなわばるすばるに逃げのびがびるめろに準備している。さすがのソッタも、裸でボビーを追い回すようなことはしないだろう。

「なんだあつ。あわは……」

ソッタは目を細めながら格子窓へと近づいてきた。そしてそれがペニスだとわかる。明ら

かに不快な顔をする。

「うげっ、チンポじゃねえか。おいっ、変態だ。風呂場の窓の外に変態がいるぞっ!」

(躊躇なしかよっ!)

ボビーはまずいと思うべきま逃げ出した。ペルツにも同じことをしたのだが、ソッタと似たり寄ったり反応である。ボビーのペニスではまだこの二人を魅了することはできないようだった。

(考えてみれば、エグバードの野郎のチンポはもっとでかかったな。そんな巨根と毎日のようにセックスしてるあいっつらだ。俺のペニスはまだまだ粗チンか)

比較対象が悪かった。勇者エグバードはペニスの性能も勇者なのだ。そんな勇者に勝つためには、ボビーは勇者以上のペニスにならないといけない。

(マリーのレベルアップを待つのは時間がかかりすぎる。メリッサのスキルポイントはもうない。だったらどうすればいいんだ……?)

ボビーは早くもピンチに陥ったようだった。

「というわけだ。何とかならねえか?」

ボビーは宿屋の近くにマリーとメリッサを呼び出していた。

「うん。私は駆け出し冒険者なので、これ以上何かできるようなことはないみたいですよね。すみません……」

マリーが申し訳なさそうに深々と頭を下げる。

「メリッサのほうはどうだ? とにかくスキルポイントが集まればいい。お前みたいにスキルポイントを大量に貯めてる女冒険者とか他にいないねえか?」

「そんな冒険者がそう簡単にいてたまるんですか。スキルポイントをいっぱい持ってるのなら、もう目的のスキルを取得してステータスも限界まで上げた超上級者くらいよ。そんな冒険者、世界に二、三人くらいしかないんじゃない?」

その二、三人をボビーは知っている。やはりあの勇者たちは世界でもトップクラスの冒険者だったのだ。

「しかしなあ、あいつらからスキルポイントを奪うこともできねえし、何とかしねえと……」
「……別にスキルポイントが増えればいいのよね?」

「ああん? まあ、そつだが……。何か心当たりがあるのか?」

「確実じゃないけど、あるわ。」この町の道真屋は、スキルポイントを上昇させるレアアイテム——『スキルポーション』を取り扱ってるらしいのよ」

「へえ、そいつは初耳だ。なるほど、その道真屋から奪えばいいわけだな」

「盗むのは無理よ。そついうレアアイテムは厳重に保管されてるはずだから」

「だからってそれしか方法はねえんだ。やるしかねえだろっ」

「もう少し話を聞いて。その道真屋の店主はね、若い女みたいなのよ」

「……ほう。美人か？」

「まあ、それなりにね。私には負けるけど」

「プライドの高いメリッサが一応は美人と認めるのだ。期待はできるだろう。」

「それに、胸が大きいらしいわよ」

「へへへっ……。そいつは楽しみだな。よし、その道真屋の店主を堕としてスキルポジションを全部いただいちゃうか。それで俺のチンポも大幅強化だぜ」

「もちろん、情報料はいただくわよ。そのチンポで」

「わかってるよ」

「あの……。私も……」

「マリイは俺の役に立つまでおあずけだ」

「そ、そんなぁ……」

マリイは何とかしてボビーの役に立とうと必死に頭を悩ませる。こうしてボビーは飽はかりでなく鞭も与えてヘニスに魅了された女たちを操っているのだった。

「いらっしやいませー」

ボビーはさっそくメリッサに紹介してもらった道真屋を訪ねてみた。小さい店だったが、小奇麗に整理されていて品の良さがつかえる。そして何より、店主の女性はボビーが満足するほどの美人だった。

（へへへっ、こいつは当たりだぜ）

おっぱいもメリッサの情報通りかなりの巨乳だ。しかし、ボビーが店主の女性を品定めすると同様に、店主の客であるボビーを品定めしていたのである。

「あのー、お客様……、ですか？」

「客以外に見えるのか？」

「えっ……、すみませぬ」

確かにボビーの姿は小汚く、衣服もボロボロだ。浮浪者が紛れ込んだと言われたほっぴつぐさ。

「ここにスキルポジションがあると聞いたんだが、あるか？」

「確かにありますけど……」

女店主は明らかに逡巡している。完全にボビーを怪んでいるようだった。このままではスキルポジションを見ることすらできない。だが、そこはボビーも考えていた。

「ああ、俺はただのお使いだ。ほら、この町に勇者のパーティが来たって聞いてないか？ 勇者の名前はエグバードって言うんだが」

「えっ！？ あ、あの勇者さまのパーティの方ですかっ！？」

先ほどまでとは打って変わって目を輝かしている。それほど勇者という名前には効果があるのだった。

「今までさんざん利用されてきたんだ。名前を利用するくらいいいところだねえだろっ」
あながち嘘でもないのだから信用性は高い。適当に勇者に関する話を話すと、女店主はボビーを信用したようだった。

「俺はただの荷物持ちだがな。もちろん、スキルポイントも俺じゃなくて勇者が使ったよ」
「それでしたら——」

女店主は店の奥からスキルポイントを取り出してくる。見本用として一本だけだが、どうやら本物のようだ。

「この店には全部でスキルポイントは何個あるんだっ」

「ここにあるものを含めて300本です」

スキルポイント一つで1ポイント得ることが出来る。というよりは全部取れば300ポイント得ることが出来るということだった。

（やるしかねえ）

ボビーはこの女店主を墮としてすべてのスキルポイントを奪うことを決意した。

「ところで、あんたの名前はなんて言っただっ」

「えっ？ ミツですけど、それが何かっ」

「そっか、ミツ。ちょっとこいつを見てもらえるかっ」

ボビーはいきなりスポンを脱ぎ、ペニスを曝け出した。あまりの行動にミツは悲鳴をあげる。

「きゃあっ！ な、何をしてるんですかっ！」

「何って、お前にチンポを見せてるんだよ。どうだ、立派なものだろっ」

「は、早くしまってくださいっ！」

「本当にしまってくださいのかっ」

「……」

ミツは早くしまえと言っわりには横目でしっかりとボビーのペニスを見つめていた。頬は紅潮し、息は荒くなる。明らかに興奮している証だ。

ボビーは手ごたえを感じ、ミツに近づいてくる。

「よく見てみるよ。こんなチンポ、めったに見ることはできねえぞ」

ボビーはカウンターの上に立ち、ミツの目の前に自慢のペニスを突き出した。

「あっ」

ミツはそのペニスの威容に息をのむ。

「気になるなら、触ってもいいんだぜっ」

「そ、そんな……。それに、こんなところを人に見られたら勘違いされてしまいます」

「その心配はねえよ。店の外に見張りを置いてきたからな」

「見張りっ」

見張りとは、もちろんボビーからの褒美を期待しているマリーのことだった。すでに店の扉に掲げられていた「OPEN」のブリートは「CLOSE」へと裏返されている。

「とにかく人が入ってくる心配はねってことさ。まあこのチンポをどうしたい？ 触るか、舐めるか、それとも、そのでっかいおっぱいで挟んでくれるのか？」

「な、何をバカなことを言ってるんですかっ！ この胸はあなたのような人を喜ばせるためのものではないですよ」

「へえ、そうかい。でも、俺はそのおっぱいでこのチンポを挟んでくれたらうれしいんだがなあ」

「……」

ボビーはこれ見よがしにペニスを動かす。左右に動かしたペニスをミラの視線がしっかりと追う。

「試しに臭いでも嗅いでみろよ」

ボビーは不意打ちで自身のペニスをミラの鼻先に押し付けた。

「うっー」

ミラは思わずのけぞったが、すべなまボビーのペニスの臭いが嗅げる位置に戻る。やはり興味はあるようだだった。

「臭いですね」

「でも、癖になる臭いだろっ」

「……」

ミラは否定しなかった。いや、否定できなかったのだろう。

「このチンポをそのおっぱいでこいてみたくはないか？ こんなにもでかいチンポなんだぜ。きつとおっぱいも気持ちいいはずだ」

「そんな、チンポをおっぱいに挟んで気持ちよかったことなんてないですよ」

「へえ、すでに誰かで試したことがあるのか。で、それいっつのは不満だったん」

「……っー」

ミラは自分の失言に気づいて顔を真っ赤に染める。こんなことを言ってしまったのも、ボビーのペニスを翻弄されている証拠だった。

「俺のチンポはそんなやつこのチンポとは違うぜ。いいから試してみろよ」

「えっ、あっ、ちょっとっー」

ボビーは無理やりミラの服を脱がすと、その巨大なおっぱいを曝け出させた。本来なら激しく抵抗されるはずのだが、そこはペニスが魅了されていると確信しているのでボビーも大胆だった。

「ほりっ」

「あんっー」

ボビーはペニスでミラのおっぱいを軽へつついた。それだけミラは声を出してしまつてぽん感じてしまう。

「私、何で……」

「それは俺のチンポがすごいからだよ。ほら、もっと俺のチンポを感じてみよう」

ミラはまるで魔法にかかったかのようにボビーのペニスをおっぱいで包んでいく。ただそれだけなのに、ミラは官能的な幸福感を確実に感じていた。

「ああ……」

「いいぜ。動かしてみろ。やったことがあるならわかるだろうっ」

「は、はい……」

ミラはボビーの指示通りにパイズリを始める。本来ならパイズリで女性が性的興奮を覚えることはあまりないのだが、ボビーのペニスに魅了された状態のミラは、ただペニスに奉仕するという行為だけで幸せを感じているのだ。これがペニスに魅了されるといふことの恐ろしさである。

ズリュ、ズリュ、ズリュ。

経験者だけあり、ミラのパイズリはこなれていた。しかし、巨大化したボビーのペニスはミラのおっぱいでは完全に包み込むことができず、先っぽが亀の頭のように飛び出していた。

「すごい……。私のおっぱいでも包み切れないチンポがあるなんて……」

「感動しているところ悪いんだが、俺、もう出そうなんだわ」

「えっ？ もう出るのっ？」

「悪いが今はまだ早漏なんだよ。うっ、出るっー！」
びゅるるるっー

ボビーは唐突に射精してしまった。しかもその量といい濃さといい、何とも男として情けないものである。これにはミラも失望した。

「へへへっ、そんな顔するな。確かに俺は見た目に反してチンポの性能はこんなもんだ。でもな、もしスキルポジションがあればもっとすごいもんになるんだぜっ」

「えっ？ 何で、スキルポジションが関係してくるんですか？」

「それはな、これが関係してるんだよ」

ボビーはミラに黒いスキルカードを見せた。そこにはボビーのペニスの性能が細かく書かれている。

名前 ボビー

長さ 20センチ

太さ(周径) 11センチ

精液量 Gランク（最低）
持続時間 Fランク
テクニック Eランク
魅力 Cランク
保有スキルポイント 0

「何ですか、これ……。どこで見つけてきたんですかっ!？」

道員屋としてミラは珍しいアイテムに興奮している。確かに悪魔からもらったこの黒いスキルカードは超がつくほどのレアアイテムだろう。

「まあ、それは後で話すさ。それよりも、これは俺のチンポのステータスなんだよ。見ての通り、チンポの確かさと魅力はますますだが、それ以外がダメだ」

「そのようですな」

「しかし、このスキルカードを持っていれば、スキルポイントでこれらのステータス上げる
ことができるんだよ」

「まさか、それでスキルポジションを……」

「へへへっ、その通りさ」

「だ、ダメですよっ! スキルポジションはとても貴重なものです。一つだけでもこの店の商品
を全部買えるくらいなんですからっ!」

「タダとは言わねえよ」

「えっ? お金を払ってくれるんですか?」

「いや、金じゃない。俺がお前にやるのは、これだよ」

ボビーは再びミラの目の前にペニス突き出す。これさえあればなんでも手に入ると言わ
ばかりだ。

「な、何をバカなことを……。そんなものでスキルポジションを渡すわけじゃないですか」

「いいや、渡すね。お前が俺にスキルポジションを譲ってくれば、俺のチンポは大幅に強化
される。それはお前をこのチンポで気持ちよくさせてやるってことだぜ? そこまで火照っ
た身体で、今から寝られるのかよ」

「……」

ボビーはミラの心の隙間を的確に衝いてきた。貴重なスキルポジションを渡すわけにはいか
ないという気持ちで、もっとボビーのペニスで気持ちよくになりたいという気持ちがせめぎあ
う。しかし、こういう場合に勝つのはより原始的な欲求のほうだった。

「条件があります」

「ほっ、なんだ?」

「全部のスキルポジションを使うことはできません」

「へへへっ、そりゃそうか。いいぜ。お前が許す分だけでも十分だ」

「それと、強化するチンポのステータスは私が決めさせてください」

「なるほど。自分の好きなように俺のチンポを作り変えたいってことだな。まったく、こういうのも独占欲が強いって言うのかな」

「ミラはあくまで自分が主導権を握ろうとした。しかし、それもボビーのペニスに魅了されている状態では怪しいところではあったが。」

「まずは、そのスキルカードが本物かどうか確かめさせてもらいます」

「ミラはまずスキルポジションを一本ボビーに差し出した。」

「強化する項目は、『太さ』です」

「へへへっ、いいぜ。俺のチンポが太くなるところをしっかりと見ときな。いや、触ってたほうがわかりやすいか？」

「そうですね。では……」

「ミラは変化がわかりやすいようにボビーのペニスを軽く握った。これで本当にペニスが太くなればすぐにわかるだろう。」

「じゃあ、いぐぜ」

ボビーはスキルポジションを飲み干すと、得たスキルポイントをペニスの『太さ』の強化に使った。一瞬でボビーのペニスは1センチ太くなる。

「ほ、本当に太くなったみたいです」

「へへへっ……。これでこのスキルカードが本物だってわかっただろう？　で、お前はどの項目をどのくらい強化してくれるんだ？」

「……」

「ミラはボビーのスキルカードを見つめながら考える。ペニスの大きさに不満はない。あるとすれば射精に関する項目だろう。」

「では、『精液量』をDランクまで。あと、『持続時間』もDランクまでお願いします」

「ってことは、全部で5ポイント必要だな。スキルポジションを5つよこしな」

ボビーの傲慢な態度が気に入らなかったが、ミラは素直にスキルポジションを店の奥から5つ持ってきた。ボビーはすぐさま5本のスキルポジションを飲み干すと、ミラが指定した通りの『精液量』と『持続時間』をDランクまで上昇させる。

「これでようやく人並みってところか。ところで、本当にこれでいいのか？　これじゃあただでかいだけの普通のチンポだ。お前が求めているのは、普通じゃないチンポじゃないのか？」

「わ、私は、別に……」

「だから素直になれよ。お前はもっと濃厚な精液を味わいたいんだろう？　そしてもっとチンポを味わっていたい。Dランクのペニスじゃそんなものは体験できないぞ」

「それなら、『精液量』にもう2ポイント……」

「お前も勝負が下手だねえ。そんな中途半端に上げてどうすんだよ。そこまで来たらAランクまで上げとけよ。どうせ体験するなら最高の体験をしたいだろうっ」

「最高の、体験……」

ミウは「クリと生唾を飲み込む。すでにボビーのペニスを欲求不満のような状態にされているミウにとって、最高のペニスで最高の体験をしてみたいという欲望は心の奥からぶつぶつ湧き上がってきているのだ。

ミウが店の奥から持ってきたスキルポジションは六本だった。

『精液量』と『持続時間』を、Aランクまで

「へへへっ……。それでいいんだよ」

ボビーはスキルポジションを飲み干してミウに言われた通りに『精液量』と『持続時間』をAランクまで上昇させる。これでボビーのペニスは『精液量』と『持続時間』に関してはトップクラスの能力を持ったことになった。

「よし、ご褒美だ。このチンポを存分に味わいな」

「は、はっ」

ミウは先ほどのようにボビーのペニスをその大きなおっぱいで包み込んだ。やはり普通よりも大きいボビーのペニスはパイシリするほつもやりがいがあるらしく、ミウの表情は嬉々としていた。

「持続時間も強化したからな。今回はそう簡単に射精しねえぞ。満足するまでパイシリしな」

「は、はいっー」

ミウは先ほどの続きとばかりに熱心にパイシリをしている。もともと献身的な性格なのだろう。それにボビーのペニスが魅了されているということもあり、パイシリしているだけでかなりの幸福感に満ち溢れていた。

「じゅ、じゅか？ 気持ちいいですか？」

「ああ、いいぜ。しかもこんなにも気持ちいい感触を長い間楽しめるってのも最高だぜ」

ボビーは今までペニスを刺激されたらすぐに射精するほどの早漏だった。しかし、今は違う。

『持続時間』はAランクの最高クラスなのだ。めったなことでは暴発することはない。

「ミウ、ここまで来たんだ。もっと気持ちよくなるっぜ。俺のテクニックも最高まで上げてくれよ」

「そ、そんなことしたらまたスキルポジションが……」

「スキルポジションなんてめったに買う人がいねえじゃねえか。買う人がいないならそれはないも同じ。そんなあるかないかわからないようなものよりも、今を楽しむべきだろうっー」

「あ、ああ……」

ミウも興奮で思考力が低下している。ボビーの言葉が戯言だとわかっているのに、それを否定する言葉が出てこない。

「面倒だ。もう残りのスキルポーション全部持ってきた。それが正しいスキルポーションの使い方ってもんだぜ」

「そう……。そうかも、しれせんね……」

ミウはボビーに言われた通り店の奥にあったスキルポーションをすべて持ってきてしまった。「へへへっ……。いいぜ。お前は正しい選択をした。その証拠を見せてやるよ」

ボビーはミウが持ってきたスキルポーションをすべて飲み干し、そのスキルポイントも余すことなく全部使い切った。その結果が次の通りである。

名前 ボビー

長さ 28センチ

太さ（周径） 16センチ

精液量 Aランク

持続時間 Aランク

テクニック Aランク

魅力 Aランク

保有スキルポイント 0

「へへへっ！　なんだ、こりゃ。こんなチンポ今まで見たことねえっ！　こいつは女を墮とすためにある最強のチンポじゃねえかっ！」

「す、すい……」

ミウも最大級までに進化したボビーのペニスに見惚れている。ここまでくるとこれ以上のペニスを持っている男はまずいないだろう。あの勇者エグバードですらここまでではない。

「これ、私のペニスなんですよねっ」

「へへへっ……。今晚だけはそれでいいぜ。お前のおかげでこんなチンポを手に入れることができたんだ。一晩中相手してやるよ」

ボビーは先ほどの続きとばかりに巨大なペニスをミウのおっぱいに突き入れる。この時点でボビーのペニスはミウのおっぱいを突き抜け、その口先まで迫っていた。

「ああ、すい……」

「舐めな。パイズリしながらでもできるだろうっ。」

「は、はい……」

ボビーとミウの上下関係は完全に決まってしまった。もはやこのペニスを見て屈しない女はこの世にはいないと思えるほどだ。

ジュポッ、ジュポッ、ジュポッ。

ズリュ、ズリュ、ズリュ。

ミウはパイズリとフェラを同時に行う。ボビーに与える快感は倍以上になったはずなのに、それでもボビーのペニスは暴発しなかった。

「へへへっ……。すげえ。これなら本当に一晩でも一晩でも女の相手ができるぜ」

「ぷはっ。で、でも、そろそろ精液が欲しいです……。全部飲み干しますから、出してくれませんか?」

「ああ、それもそうか。強化してからまだ射精してないもんな。試運転として一発出してみるか」

「あつがういづれもあつー。」

ミラはここぞとばかりにパイズリフェラの速度を上げる。ついにボビーの強化された精液を飲むことができると思うと興奮してきたのだろう。そんな献身的なミラを見ているだけでボビーのペニスにも血流が集まってきた。

「い、いぜ、イクぞっ！」

「はい、来てくださいます！」

[illegible]

「ふはっ！ 何、これ。溺れる……っ！」

「へへへっ！　なんだよ、これ。こいつはすげえっ！　噴水のように精液があふれ出てくるぜー！」

全部飲むと言ったミウだったが、大量の精液を飲み干せるわけもなく、代わりに全身が精液まみれになった。

「いああ……。どうどう……」

ミラムこの精液量には満足したのか、完全に放心状態になってしまった。しかし、こんなにも射精したというのにボビーはまだまだ満足していない。

「おいおい、一晩相手してくれるんだろう？ 夜はまだ長いんだ。俺が満足するまでへばるんじゃないぞ」

「ふえ……? きゃあっ!」

ホビーはミウの上に馬乗りになると、再びパイプリを始めた。今日はとことんミウの巨乳で遊ぶつもりなのだろう。

こうして、ボビーのペニスは最高レベルまで強化され、ペルラやゾツタを墮とすための準備は完了した。

「へへへっ……。待ってろよ、ペルラ、ゾッタあ……。っ！」

あとうがき

本作品の感想や誤字脱字の報告などは私の支援サイトである Ci-en までメールでお願
いください。 (<https://ci-en.dlsite.com/creator/16754>)

今回は本作品の体験版を試し読みつつただただおめうがうていようもった。製品版もメール
をお願いいたします。